

芳賀町建築物耐震改修促進計画 (三期計画)

令和3年3月

芳 賀 町

第1章 基本方針

1 背景と目的	1
2 位置づけ	2
3 計画期間	3
4 耐震改修促進法の改正について	3

第2章 建築物の耐震化の目標等

1 地震被害の想定及び減災効果	4
2 住宅・建築物の耐震化の現状及び課題	7

第3章 建築物の耐震改修の促進を図るための施策

1 基本的考え	10
2 取り組むべき施策	10
3 建築物の耐震化の促進	12
4 地震時の被害を軽減するための安全対策	13

第4章 計画の推進に向けて

1 計画の推進体制	14
2 計画の見直しについて	14

参考資料

資料1 建築物の耐震診断及び耐震改修の促進を図るための基本的な方針	15
資料2 耐震改修促進法における規制対象一覧	27
資料3 緊急輸送道路ネットワーク計画図	28
資料4 一定の高さ以上の住宅・建築物	29

第1章 基本方針

1 背景と目的

平成23年3月に発生した「東日本大震災」では、これまでの想定をはるかに超える地震・津波により、一度の災害としては戦後最大の人命が失われるなど、甚大な被害をもたらされました。また、平成30年6月の大阪府北部地震においても天井やブロック塀等の脱落・倒壊などによる被害が発生し、柱や梁以外のいわゆる非構造部材を含めた、総合的な耐震化の重要性が改めて確認されました。

さらに、南海トラフ地震や首都直下地震等の大規模地震の発生の切迫性が指摘され、東日本大震災を越える甚大な被害の発生が懸念されています。

栃木県では、住宅・建築物の耐震化を促進するため、「建築物の耐震改修の促進に関する法律」（平成7年法律第123号。以下「耐震改修促進法」という。）に基づき、平成18年より「栃木県建築物耐震改修促進計画」を策定し、それを踏まえた形で本町でも平成21年より「芳賀町建築物耐震改修促進計画」を策定し、住宅・建築物の耐震診断及び耐震改修の促進に取り組んできました。

その結果、多数の者が利用する建築物については、目標値である耐震化率100%をおおむね達成しましたが、その一方で、住宅については耐震化が遅れており、目標値の達成に至っていない現状があります。

このため、耐震化の現状や課題を踏まえるとともに、国の「建築物の耐震診断及び耐震改修の促進を図るための基本方針（平成18年告示第184号。以下「国の基本方針」という。）」及び、「栃木県建築物耐震改修促進計画（三期計画）」に基づき、令和7年度までを計画期間とする「芳賀町建築物耐震改修促進計画（三期計画）」を策定しました。

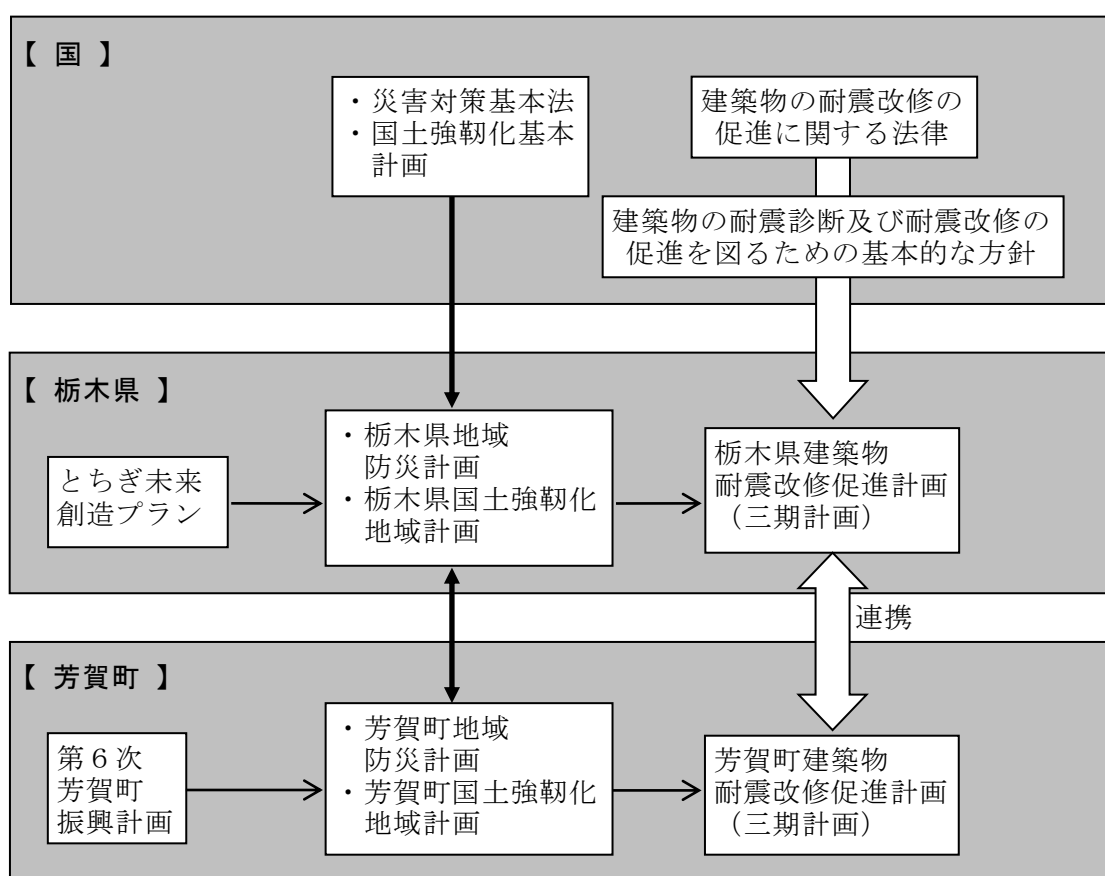
今後とも、本計画に基づき、町内の住宅及び建築物の耐震化に取り組み、町民の皆さまのより一層の安全・安心の確保に努めます。

2 位置づけ

耐震改修促進法では、建築物の耐震診断及び耐震改修の促進を図るための計画策定を市町村の努力義務としています。本計画は、この耐震改修促進法と国の基本方針及び「栃木県建築物耐震改修促進計画（三期計画）2021～2025」（以下、県計画）を勘案し、平成 29 年 3 月に策定した「芳賀町建築物耐震改修促進計画(二期計画)」を見直し三期計画として定めたものです。

また、計画の策定及び施策等の実施に際しては、町政の基本指針である「第 6 次芳賀町振興計画」や本町の防災対策の基本となる「芳賀町地域防災計画」（平成 25 年 3 月）等との整合を図ります。

計画位置づけイメージ図



3 計画期間

本計画の期間は、県計画を踏まえ、令和3年度から令和7年度までの5年間とします。

なお、社会情勢の変化、国の動向、耐震化の進捗状況などを勘案し、計画に掲げた施策の実施効果について定期的に検証を行い、必要に応じて計画の見直しを行います。

4 耐震改修促進法の改正について

平成25年11月の改正では、住宅・建築物の耐震化の促進のための規制強化等がなされました。また、平成30年6月の大阪府北部地震において、ブロック塀の倒壊による死亡事故が発生したことを契機として、避難路等の安全性確保のため政令改正等がなされました。

改正の主な内容は、多数の者が利用する大規模建築物等^{※1}のうち、一定規模以上のものについて、耐震診断の実施と所管行政庁^{※2}への結果報告が義務付けられたことや、耐震関係規定に適合しないすべての既存不適格建築物^{※3}について、耐震化の努力義務が課せられたことなどがあります。

また、耐震性に係る表示制度の創設や、所管行政庁の認定を受けた耐震改修における容積率・建ぺい率の特例などの促進策も設けられました。

政令改正では、一定規模以上の危険ブロック塀で避難路沿道にあるものの耐震診断の実施と所管行政庁への結果報告が義務付けられました。

※1 多数の者が利用する建築物等については、資料編 資料2参照

※2 原則、建築主事を置く市町村又は特別区の区域については当該市町村又は特別区の長、その他の市町村又は特別区の区域内については都道府県知事（栃木県においては、県のほか宇都宮市、足利市、栃木市、佐野市、鹿沼市、日光市、小山市、大田原市、那須塩原市が該当）

※3 昭和56年5月までに着工した住宅・建築物で、地震に対する安全性に係る建築基準法（昭和25年法律第201号）又はこれに基づく命令若しくは条例の規定に適合しないもの

第2章 建築物の耐震化の目標等

1 地震被害の想定及び減災効果

(1) 過去の主な地震被害

本町を含めた栃木県とその周辺において発生し、被害を及ぼした主な地震は、以下のものがあります。栃木県は、地震による被害の発生頻度が低いものの、過去には大地震による被害が発生しています。

本県に被害を及ぼした主な地震^{※4}

西暦（和）	地震名	震災地	地震の規模	主な被害
1923年9月1日 （大正12）	関東地震 （関東大震災）	関東南部	M7.9	県内の最大震度5。負傷者3人、家屋全壊16棟、半壊2棟。
1949年12月26日 （昭和24）	今市地震	今市地方	M6.2 （8時17分） M6.4 （8時25分）	今市を中心に被害。死者10人、負傷者163人、住家全壊290棟、半壊2,994棟、一部破損1,660棟。
2011年3月11日 （平成23）	平成23年東北地方 太平洋沖地震 （東日本大震災）	東北から 関東北部 の太平洋 沿岸	M9.0	死者4人、負傷者133人、住家全壊261棟、住家半壊2,118棟（平成26年9月10日現在、消防庁調べ）
2013年2月25日 （平成25）	栃木県北部地震	日光	M6.2	人的被害無し。温泉宿泊施設一部破損6棟。

※4 栃木県地震減災行動計画より抜粋

(2) 想定される今後の地震の規模、被害状況及び減災効果

平成 27 年度から令和 6 年度までの 10 年間を計画期間とする「栃木県地震減災行動計画」では、栃木県において最も甚大な被害を及ぼす可能性が高い地震として、以下のとおり「県庁直下に震源を仮定した地震」を想定し、その被害を予測しています。

ア 想定条件

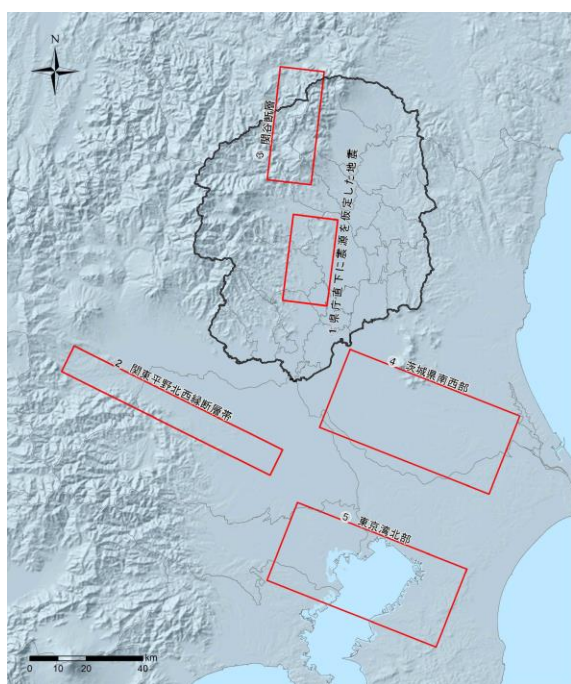
想定地震名	地震規模	断層長さ	断層幅
県庁直下に震源を仮定した地震	M7.3	30km	18km

イ 発災ケース

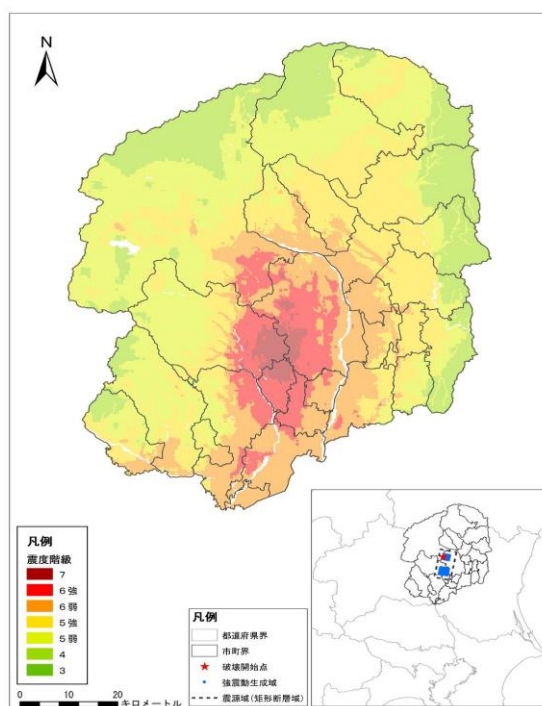
過去の地震の例などから、地震発生の季節や時刻によって被害規模等が異なってくることが考えられるため、以下のケースを設定しています。

冬深夜	多くが自宅で就寝中に被災するため、建物倒壊による死者が発生する可能性が高い。一方、オフィスや繁華街の滞留者や鉄道、道路の利用者が少ない。
冬 18 時	住宅、飲食店などで火気使用が最も多い時間帯で、出火件数が最も多くなる。オフィスや繁華街周辺のほか、ターミナル駅にも滞留者が多数存在する。

想定震源の位置図



震度分布図



ウ 想定される被害の状況及び減災効果

栃木県では、県庁直下に震源を仮定した地震において想定されている被害及び各種減災対策を講じることにより得られる減災効果を以下のとおり想定しています。

特に、住宅・建築物の耐震化を促進することにより、地震発生時の建物倒壊や人的被害を軽減させることができます。

建物被害・人的被害の減災効果の算出結果^{※5}

減災効果	建物被害				
	全壊棟数（棟）				
	液状化	地震動	土砂災害	焼失棟数 ^{※6}	合計
現状	798	61,921	68	8,025	70,812
対策後	475	22,969	66	1,556	25,067
減災率	40%	63%	2%	81%	65%

減災効果	人的被害 ^{※7}				
	死者数（人）				負傷者（人）
	建物倒壊	土砂災害	火災	合計	
現状	3,829	6	92	3,926	32,081
対策後	1,332	6	7	1,345	13,639
減災率	65%	0%	93%	66%	57%

※5 合計は小数点以下の四捨五入により合わないことがあります。

栃木県の各部局で実施している防災・減災のための施策や事業を総合的に取り組んだ場合に得られる減災効果です。

※6 発災ケース 冬18時

※7 発災ケース 冬深夜

2 住宅・建築物の耐震化の現状及び課題

(1) 耐震化の現状

前回計画策定時の平成 27 年度（平成 27 年 12 月）から令和 2 年度までの耐震化率の実績は、以下のとおりです。

耐震化の現状

種別	耐震化率		
	基準年度 (平成 27 年度)	R2 年度目標	R2 年度実績 (見込み)
住宅	72.8%	95%	77.0%
多数の者が利用する建築物	99.0%	100%	99.0%
学校	100.0%	-	100.0%
病院・診療所	-	-	-
社会福祉施設	-	-	-
賃貸共同住宅	100.0%	-	100.0%
その他（事務所・工場等）	98.9%	100%	98.9%
防災上重要な町有建築物	91.7%	100%	91.7%

ア 住宅の耐震化の現状

平成 27 年度から令和 2 年度までの間で耐震性を有する住宅は 375 戸増加し、耐震化率は 72.8%から 77.0%になりました。多くは建替えや新築によるものです。

令和 2 年度の目標値である 95%を達成できなかった要因としては、地震に対する危機意識の不足等から耐震改修等が進まなかったことが挙げられます。また、旧耐震基準で建てられた住宅が築後 35 年以上経過したことによる老朽化や、居住者の高齢化や家族構成が変化したことにより、改修費の増大と地震に備えるための投資的予算が不足し、耐震改修が進まなかったと推測されます。

町では耐震改修等に係る費用に対しての補助制度を設けていますが、今後は住民への周知をより一層強化していく必要があります。

また、予算や家族構成により、耐震化の実施が困難となる場合に、地震から身を守る手立てが無いことや、耐震性が不十分で管理が行き届かない住宅が地震により倒壊することによる危険性も課題の一つとなります。

イ 多数の者が利用する建築物の耐震化の現状

平成 27 年度から令和 2 年度までの間で耐震性を有する多数の者が利用する建築物は 3 棟増加し、耐震化率は 99.0%となりました。多数の者が利用する建築物についても、耐震化の多くは建替えや新築によるものです。

目標をおおむね達成していますが、残る耐震化されていない建築物については耐震改修時期が未定であり、想定される大規模地震による被害が懸念されるため、耐震化の促進が課題となっています。

ウ 防災上重要な町有建築物の耐震化の現状

防災上重要な町有建築物については、令和 2 年度時点の耐震化率は 91.7%となっています。

残りの耐震性が不十分な防災上重要な町有建築物についても、利用者の安全確保に加え、災害時の拠点施設としての機能を有していることから、早急に耐震化を図る必要があります。

(2) 耐震化の目標

ア 国の基本方針による目標

国では、平成 30 年住宅・土地統計調査の結果から、平成 30 年時点の住宅の耐震化率を 87%と推計しました。これを受け、これまで掲げていた令和 2 年度までの耐震化率目標 95%の目標達成は困難であるとの見方を示しており、令和 2 年度の耐震化率目標を 5 年間スライドし、令和 7 年度までに 95%にすることを目標とするとともに、令和 12 年度までに耐震性が不十分な住宅をおおむね解消することを目標にしています。

イ 本町の目標

本町における住宅及び特定建築物等の耐震化の目標については、前計画の実績や課題を踏まえ、国の基本方針及び栃木県の計画と整合を図り、令和 7 年度を目標年度とした建築物の種別ごとの目標を以下のとおり設定します。

耐震化の目標

種 別	耐震化率	
	現状 (R2)	目標 (R7)
住宅	77.0%	95%
多数の者が利用する建築物	99.0%	100%
防災上重要な町有建築物	91.7%	100%

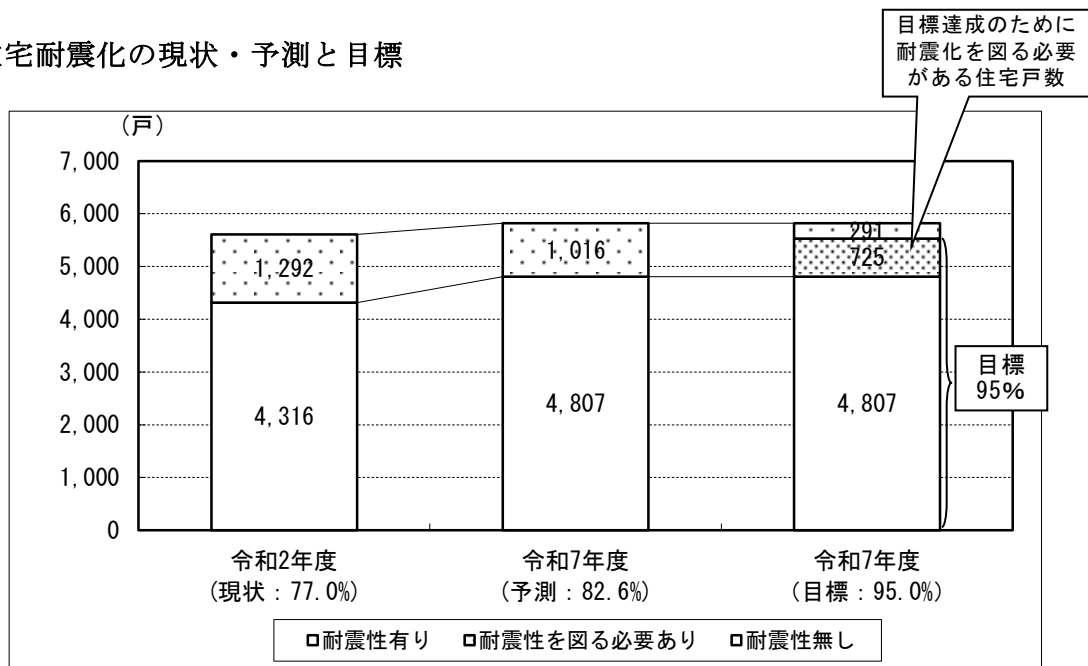
【住宅】

国の基本方針や栃木県の計画を踏まえ、令和7年度までに耐震化率を95%とすることを目標とします。

住宅の老朽化等に伴い改修や建替えなどにより耐震性のある住宅は、これまでの実績を勘案すると、目標年において約82.6%の耐震化率になると推計されます。

今後、目標とする耐震化率を達成するために、耐震化を促進する施策を実施していくことにより、さらに約725戸の耐震化を図ります。

住宅耐震化の現状・予測と目標



【多数の者が利用する建築物】

令和2年度における多数の者が利用する建築物の耐震化率は99%であります。これらの建築物は、震災による倒壊被害が甚大になる恐れがあるため、耐震化を促進する施策を実施していくことにより、耐震化率100%を目指します。

【防災上重要な町有建築物】

令和7年度までに、防災上重要なすべての町有建築物を耐震化することとし、目標を100%に設定します。

第3章 建築物の耐震改修の促進を図るための施策

1 基本的考え

建築物の耐震化を促進するためには、建築物の所有者等が、地域防災対策を自らの問題、地域の問題として意識して取り組むことが不可欠です。本町は、こうした所有者等の取り組みを支援するため、国や県からの助言や情報提供、補助事業（住宅・建築物耐震改修等事業）等を活用しながら、建物所有者等にとって耐震診断及び耐震改修等を行いやすい環境の整備や負担軽減を図る制度の構築など、耐震化に当たっての課題を解決していくことを基本的な考え方とします。

2 取り組むべき施策

(1) 安心して相談できる環境の整備

ア 相談窓口の設置

建築物の耐震化に関する窓口を設置し、町民への情報提供を図ります。

また、所有者等が知りたい情報を的確に提供できるよう、より相談しやすい窓口の整備に努めます。

イ 耐震アドバイザーの派遣

耐震診断、耐震改修等に関する不安や悩みなどを解消するため、建築に関し豊富な経験、技術的な知識を有する耐震アドバイザーを派遣します。

(2) 普及啓発の実施

耐震化が必要となる建物所有者等に対して、住宅の耐震性が不十分であることの危険性を認識してもらうなど、耐震化に対する意識の向上を図ります。

建築物の耐震化は地域防災活動の一環でもあり、自治会の防災活動（防災訓練、危険箇所の点検、災害時要援護者の把握、人的ネットワーク構築等）等、様々な機会を捉えてこれまで以上に幅広く普及啓発を図ります。

ア 町民向けパンフレットの作成・配布

町民にとって、身近で判りやすい資料を作成、配布し、建築物の耐震診断・耐震改修等の必要性や、その効果について広く町民に普及啓発します。

イ 耐震普及ローラー作戦の実施

栃木県、耐震アドバイザーと連携し、直接住宅を訪問し、耐震化の普及啓発を行う耐震普及ローラー作戦を行います。

実施にあたっては、旧耐震基準で建てられた住宅が密集する地区や、これまでに耐震普及ローラー作戦を実施していない地区を優先して行うなど、効果的な方法で実施します。

ウ 町民向け講習会の開催、講師の派遣

耐震診断・耐震改修等の重要性について、より多くの町民に理解していただくため様々な機会を捉えて、丁寧に説明していきます。

エ ホームページの活用

耐震診断・耐震改修等に関する情報を、ホームページに掲載して広く町民に発信します。

また、本町以外の自治体や関係団体等の活動のうち、町民にとって役立つ情報であると思われる場合は、ホームページから情報入手できる設定をする等、積極的に情報提供していきます。

オ 工事現場等を活用した広報

補助を受けて実施する耐震化工事の現場等に「耐震化を実施している」旨を掲示する等、ホームページや配布物の情報が届いていない町民に対しても、興味を持って頂くための広報について、栃木県と連携して取り組みます。

(3) 各種支援の実施

ア 耐震診断、補強計画策定、耐震改修等に対する助成

昭和 56 年 5 月 31 日以前の旧耐震基準で建築された民間木造住宅について、国及び栃木県と連携し、耐震診断、補強計画策定、耐震改修等の費用の一部について補助を行います。

耐震診断、耐震改修等に要する費用は、建築物の状況や工事の内容によりさまざまですが、相当の費用を要し、建物所有者等の費用負担の軽減を図ることが課題となっていることから、更なる補助制度の拡充や新たな支援策の構築などの検討を行い、住宅の耐震化に取り組みます。

イ 避難路沿道等にある危険なブロック塀の除却に対する助成

通学路や、多くの住宅から避難所等に通じる道路沿いにある、危険なブロック塀や組積造の塀の除却に対して、補助制度や新たな支援策の必要性等の検討を行い、耐震化に取り組みます。

ウ 税制優遇

一定の耐震改修工事を実施した場合の所得税の特別控除が「住宅に係る耐震改修促進税制」として講じられています。本町は所有者に対し、所得税等が税制の特別措置を円滑に活用できるよう情報提供を行います。

(4) 芳賀町耐震化緊急促進アクションプログラム

本計画に定めた目標の達成に向け、住宅の耐震化を強力に推進するため、芳賀町住宅耐震化緊急促進アクションプログラムを策定します。

アクションプログラムでは、毎年度耐震改修等に係る支援目標を設定し、その実施・達成状況を把握、検証、公表し、対策を進めます。

3 建築物の耐震化の促進

耐震性が不十分な建築物は、大規模地震の発生による甚大な被害が懸念されており、耐震化を促進するため、普及啓発や環境の整備等の基本的な施策に加え、以下の施策を講じます。

(1) 多数の者が利用する建築物等の耐震化

多数の者が利用する建築物等の耐震化を促進するため、所有者等に対して耐震診断の必要性を周知するとともに、必要に応じて耐震改修に関する指導及び助言を行います。

(2) 避難路沿道建築物の耐震化

栃木県地域防災計画では、隣接県の主要道路と接続し、また、防災拠点や、主要公共施設、警察署、陸上自衛隊駐屯地等を結ぶ有機的な道路ネットワークとして緊急輸送道路を指定しています。

本計画では、このうち、第1次緊急輸送道路と第2次緊急輸送道路について、以下の2路線を地震発生時に閉塞を防ぐべき路線（耐震改修促進法第6条第3項第2号）として指定します。

地震発生時に閉塞を防ぐべき路線として指定する道路

県地域防災計画指定区分	該当路線名
第1次緊急輸送道路	国道123号
第2次緊急輸送道路	主要地方道 宇都宮茂木線

地震発生時に閉塞を防ぐべき路線^{※8}沿道の既存耐震不適格建築物で一定の高さ以上の住宅・建築物^{※9}の所有者等に対し、耐震化の必要性を周知します。

※8 参考資料3（栃木県緊急輸送道路ネットワーク計画図）参照

※9 参考資料4（一定の高さ以上の住宅・建築物）参照

(3) 防災上重要な町有建築物の耐震化

防災上重要な町有建築物は、本町の地域防災計画で防災拠点・指定避難場所として指定している施設であり、利用者の安全確保に加え、災害時における重要な機能も有していることから、耐震性が不足している建築物の早期の耐震化完了に努めます。

4 地震時の被害を軽減するための安全対策

(1) 家具の転倒防止の普及啓発

建築物の耐震改修をしても、また耐震性の高い住宅でも、家の中には、まだ危険が残っています。

家具や家電の転倒や落下により、被害を受ける可能性があるため、家具や家電の転倒防止について普及啓発します。

(2) 店舗等の商品陳列棚の転倒防止対策

物品販売店の商品陳列方法によっては、地震による揺れに極めて弱くなっている場合もあり、わずかな振動においても商品が落下したり、棚が倒れたりするなどした結果、店内にいる人に危険が及んだり、商品が大きな損害を受ける恐れがあります。

そこで、建築物の所有者等に対し、適正な維持管理を求めるための啓発を行います。

(3) ブロック塀等の倒壊防止対策

東日本大震災において、芳賀町においてもブロック塀等の倒壊被害が発生しました。また、県内のみならず他県ではその下敷きになって死傷者が出たり、道路を塞いで避難や救援活動の障害になるなどの被害が発生しています。

そこで、ブロック塀等の倒壊の危険性を住民や建築物の所有者に周知するとともに、正しい施工方法や補強方法を普及します。

(4) 住宅・建築物の点検

耐震改修を実施した住宅・建築物や新耐震基準で建てられた住宅・建築物であっても、年数を経れば老朽化等により、耐震性は低下していきます。

そのため、耐震性が維持されるよう、住宅・建築物等の所有者等に対し、定期的に点検を行うことの必要性について周知します。

(5) その他

耐震改修等は、建物所有者の費用負担が大きいことなど、様々な要因から実施に移せない場合もあり、耐震化されなかった住宅の人命保護、周囲への倒壊被害等が懸念されます。こうした実情を踏まえ、比較的安価な工事費で実施可能な耐震シェルターや建築物の除却等の支援策を検討していきます。

また、住宅の寝室の耐震化、窓ガラス・天井等の落下防止対策等について、建築物防災週間の機会を捉えて改善指導等を行います。

第4章 計画の推進に向けて

1 計画の推進体制

住宅・建築物の耐震化を促進するためには、所有者等が地域防災対策を自らの問題、地域の問題として意識して取り組むことが不可欠です。

本町は、国及び県と連携しながら耐震化に関する普及啓発、環境の整備及び負担軽減等の施策によって、所有者等の取り組みを支援します。

また、効果的かつ確実に耐震化を促進するため、それぞれの適切な役割分担のもと、耐震化に取り組むこととします。

(1) 町の役割

町民に最も身近な行政主体として、県や建築関係団体と連携を図りながら、建築物の所有者等が耐震診断や耐震改修等を行いやすい環境を整えます。

また、町自ら所有管理する建築物については、計画的に耐震化を進めます。

(2) 町民（住宅・建築物の所有者等）の役割

自らが所有、管理する住宅・建築物の地震に対する安全性を確保するとともに、その維持に努めます。

特に、多数の者が利用する建築物の所有者等は、当該建築物の倒壊等が地域の安全性に重大な影響を与えかねないということを十分認識して、できるだけ早期に耐震診断・耐震改修等の実施に取り組むものとします。

2 計画の見直しについて

本計画に掲げる目標を達成するためには、耐震化の進捗状況を把握し、課題に的確に対応する必要がありますので、一定期間ごとに検証し、必要に応じて計画を見直します。

資料 1 建築物の耐震診断及び耐震改修の促進を図るための基本的な方針

(平成18年1月25日 国土交通省告示第184号)

改正 平成25年10月29日 国土交通省告示第1055号

改正 平成28年 3月25日 国土交通省告示第 529号

改正 平成30年12月21日 国土交通省告示第1381号

平成七年一月の阪神・淡路大震災では、地震により六千四百三十四人の尊い命が奪われた。このうち地震による直接的な死者数は五千五百二人であり、さらにこの約九割の四千八百三十一人が住宅・建築物の倒壊等によるものであった。この教訓を踏まえて、建築物の耐震改修の促進に関する法律（以下「法」という。）が制定された。

しかし近年、平成十六年十月の新潟県中越地震、平成十七年三月の福岡県西方沖地震、平成二十年六月の岩手・宮城県内陸地震、平成二十八年四月の熊本地震、平成三十年九月の北海道胆振東部地震など大地震が頻発しており、特に平成二十三年三月に発生した東日本大震災は、これまでの想定をはるかに超える巨大な地震・津波により、一度の災害で戦後最大の人命が失われるなど、甚大な被害をもたらした。また、東日本大震災においては、津波による沿岸部の建築物の被害が圧倒的であったが、内陸市町村においても建築物に大きな被害が発生した。さらに、平成三十年六月の大阪府北部を震源とする地震においては塀に被害が発生した。このように、我が国において、大地震はいつでも発生してもおかしくない状況にあるとの認識が広がっている。また、南海トラフ地震、日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震及び首都直下地震については、発生 of 切迫性が指摘され、ひとたび地震が発生すると被害は甚大なものと想定されており、特に、南海トラフ巨大地震については、東日本大震災を上回る被害が想定されている。

建築物の耐震改修については、建築物の耐震化緊急対策方針（平成十七年九月中央防災会議決定）において、全国的に取り組むべき「社会全体の国家的な緊急課題」とされるとともに、南海トラフ地震防災対策推進基本計画（平成二十六年三月中央防災会議決定）において、十年後に死者数を概ね八割、建築物の全壊棟数を概ね五割、被害想定から減少させるという目標の達成のため、重点的に取り組むべきものとして位置づけられているところである。また、首都直下地震緊急対策推進基本計画（平成二十七年三月閣議決定）においては、十年後に死者数及び建築物の全壊棟数を被害想定から半減させるという目標の達成のため、あらゆる対策の大前提として強力に推進すべきものとして位置づけられているところである。特に切迫性の高い地震については発生までの時間が限られていることから、効果的かつ効率的に建築物の耐震改修等を実施することが求められている。

この告示は、このような認識の下に、建築物の耐震診断及び耐震改修の促進を図るため、基本的な方針を定めるものである。

一 建築物の耐震診断及び耐震改修の促進に関する基本的な事項

1 国地方公共団体、所有者等の役割分担

住宅・建築物の耐震化の促進のためには、まず、住宅・建築物の所有者等が、地域防災対策を自らの問題、地域の問題として意識して取り組むことが不可欠である。国及び地方公共団体は、こうした所有者等の取組をできる限り支援するという観点から、所有者等にとって耐震診断及び耐震改修を行いやすい環境の整備や負担軽減のための制度の構築など必要な施策を講じ、耐震改修の実施の阻害要因となっている課題を解決していくべきである。

2 公共建築物の耐震化の促進

公共建築物については、災害時には学校は避難場所等として活用され、病院では災害による負傷者の治療が、国及び地方公共団体の庁舎では被害情報収集や災害対策指示が行われるなど、多くの公共建築物が応急活動の拠点として活用される。このため、平常時の利用者の安全確保だけでなく、災害時の拠点施設としての機能確保の観点からも公共建築物の耐震性確保が求められるとの認識のもと、強力に公共建築物の耐震化の促進に取り組むべきである。具体的には、国及び地方公共団体は、各施設の耐震診断を速やかに行い、耐震性に係るリストを作成及び公表するとともに、整備目標及び整備プログラムの策定等を行い、計画的かつ重点的な耐震化の促進に積極的に取り組むべきである。

また、公共建築物について、法第22条第3項の規定に基づく表示を積極的に活用すべきである。

3 法に基づく指導等の実施

所管行政庁は、法に基づく指導等を次のイからハマまでに掲げる建築物の区分に応じ、それぞれ当該イからハマまでに定める措置を適切に実施すべきである。

イ 耐震診断義務付け対象建築物

法第7条に規定する要安全確認計画記載建築物及び法附則第3条第1項に規定する要緊急安全確認大規模建築物（以下「耐震診断義務付け対象建築物」という。）については、所管行政庁は、その所有者に対して、所有する建築物が耐震診断の実施及び耐震診断の結果の報告義務の対象建築物となっている旨の十分な周知を行い、その確実な実施を図るべきである。また、期限までに耐震診断の結果を報告しない所有者に対しては、個別の通知等を行うことにより、耐震診断結果の報告を促すように促し、それでもなお報告しない場合にあっては、法第8条第1項（法附則第3条第3項において準用する場合を含む。）の規定に基づき、当該所有者に対し、相当の期限を定めて、耐震診断の結果の報告を行うべきことを命ずるとともに、その旨を公報、ホームページ等で公表すべきである。

法第9条（法附則第3条第3項において準用する場合を含む。）の規定に基づく報告の内容の公表については、建築物の耐震改修の促進に関する法律施行規則（平成7年建設省令第28号。以下「規則」という。）第22条（規則附則第3条において準用する場合を含む。）の規定により、所管行政庁は、当該報告の内容をとりまとめた上で公表しなければならないが、当該公表後に耐震改修等により耐震性が確

保された建築物については、公表内容にその旨を付記するなど、迅速に耐震改修等に取り組んだ建築物所有者が不利になることのないよう、営業上の競争環境等にも十分に配慮し、丁寧な運用を行うべきである。

また、所管行政庁は、報告された耐震診断の結果を踏まえ、当該耐震診断義務付け対象建築物の所有者に対して、法第12条第1項の規定に基づく指導及び助言を実施するよう努めるとともに、指導に従わない者に対しては同条第2項の規定に基づき必要な指示を行い、正当な理由がなく、その指示に従わなかったときは、その旨を公報、ホームページ等を通じて公表すべきである。

さらに、指導・助言、指示等を行ったにもかかわらず、当該耐震診断義務付け対象建築物の所有者が必要な対策をとらなかった場合には、所管行政庁は、構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性について著しく保安上危険であると認められる建築物（別添の建築物の耐震診断及び耐震改修の実施について技術上の指針となるべき事項（以下「技術指針事項」という。）第1第1号又は第2号の規定により構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性を評価した結果、地震の震動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性が高いと判断された建築物をいう。以下同じ。）については速やかに建築基準法（昭和25年法律第201号）第10条第3項の規定に基づく命令を、損傷、腐食その他の劣化が進み、そのまま放置すれば著しく保安上危険となるおそれがあると認められる建築物については、同条第1項の規定に基づく勧告や同条第2項の規定に基づく命令を行うべきである。

ロ 指示対象建築物

法第15条第2項に規定する特定既存耐震不適格建築物（以下「指示対象建築物」という。）については、所管行政庁は、その所有者に対して、所有する建築物が指示対象建築物である旨の周知を図るとともに、同条第1項の規定に基づく指導及び助言を実施するよう努め、指導に従わない者に対しては同条第2項の規定に基づき必要な指示を行い、正当な理由がなく、その指示に従わなかったときは、その旨を公報、ホームページ等を通じて公表すべきである。

また、指導・助言、指示等を行ったにもかかわらず、当該指示対象建築物の所有者が必要な対策をとらなかった場合には、所管行政庁は、構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性について著しく保安上危険であると認められる建築物については速やかに建築基準法第10条第3項の規定に基づく命令を、損傷、腐食その他の劣化が進み、そのまま放置すれば著しく保安上危険となるおそれがあると認められる建築物については、同条第1項の規定に基づく勧告や同条第2項の規定に基づく命令を行うべきである。

ハ 指導・助言対象建築物

法第14条に規定する特定既存耐震不適格建築物（指示対象建築物を除く。）については、所管行政庁は、その所有者に対して、法第15条第1項の規定に基づく指導及び助言を実施するよう努めるべきである。また、法第16条第1項に規定する既存耐震不適格建築物についても、所管行政庁は、その所有者に対して、同条第

2 項の規定に基づく指導及び助言を実施するよう努めるべきである。

4 計画の認定等による耐震改修の促進

所管行政庁は、法第17条第3項の計画の認定、法第22条第2項の認定、法第25条第2項の認定について、適切かつ速やかな認定が行われるよう努めるべきである。

国は、これらの認定について、所管行政庁による適切かつ速やかな認定が行われるよう、必要な助言、情報提供等を行うこととする。

5 所有者等の費用負担の軽減等

耐震診断及び耐震改修に要する費用は、建築物の状況や工事の内容により様々であるが、相当の費用を要することから、所有者等の費用負担の軽減を図ることが課題となっている。このため、地方公共団体は、所有者等に対する耐震診断及び耐震改修に係る助成制度等の整備や耐震改修促進税制の普及に努め、密集市街地や緊急輸送道路・避難路沿いの建築物の耐震化を促進するなど、重点的な取組を行うことが望ましい。特に、耐震診断義務付け対象建築物については早急な耐震診断の実施及び耐震改修の促進が求められることから、特に重点的な予算措置が講じられることが望ましい。国は、地方公共団体に対し、必要な助言、補助・交付金、税の優遇措置等の制度に係る情報提供等を行うこととする。

また、法第32条の規定に基づき指定された耐震改修支援センター（以下「センター」という。）が債務保証業務、情報提供業務等を行うこととしているが、国は、センターを指定した場合においては、センターの業務が適切に運用されるよう、センターに対して必要な指導等を行うとともに、都道府県に対し、必要な情報提供等を行うこととする。

さらに、所有者等が耐震改修工事を行う際に仮住居の確保が必要となる場合については、地方公共団体が、公共賃貸住宅の空家の紹介等に努めることが望ましい。

6 相談体制の整備及び情報提供の充実

近年、悪質なりフォーム工事詐欺による被害が社会問題となっており、住宅・建築物の所有者等が安心して耐震診断及び耐震改修を実施できる環境整備が重要な課題となっている。特に、「どの事業者に頼めばよいか」、「工事費用は適正か」、「工事内容は適切か」、「改修の効果はあるのか」等の不安に対応する必要がある。このため、国は、センター等と連携し、耐震診断及び耐震改修に関する相談窓口を設置するとともに、耐震診断及び耐震改修の実施が可能な建築士及び事業者の一覧や、耐震改修工法の選択や耐震診断・耐震改修費用の判断の参考となる事例集を作成し、ホームページ等で公表を行い、併せて、地方公共団体に対し、必要な助言、情報提供等を行うこととする。また、全ての市町村は、耐震診断及び耐震改修に関する相談窓口を設置するよう努めるべきであるとともに、地方公共団体は、センター等と連携し、先進的な取組事例、耐震改修事例、一般的な工事費用、専門家・事業者情報、助成制度概要等について、情報提供の充実を図ることが望ましい。

7 専門家・事業者の育成及び技術開発

適切な耐震診断及び耐震改修が行われるためには、専門家・事業者が耐震診断及び

耐震改修について必要な知識、技術等の更なる習得に努め、資質の向上を図ることが望ましい。国及び地方公共団体は、センター等の協力を得て、講習会や研修会の開催、受講者の登録・紹介制度の整備等に努めるものとする。特に、耐震診断義務付け対象建築物の耐震診断が円滑に行われるよう、国は、登録資格者講習（規則第5条に規定する登録資格者講習をいう。以下同じ。）の十分な頻度による実施、建築士による登録資格者講習の受講の促進のための情報提供の充実を図るものとする。

また、簡易な耐震改修工法の開発やコストダウン等が促進されるよう、国及び地方公共団体は、関係団体と連携を図り、耐震診断及び耐震改修に関する調査及び研究を実施することとする。

8 地域における取組の推進

地方公共団体は、地域に根ざした専門家・事業者の育成、町内会や学校等を単位とした地震防災対策への取組の推進、NPOとの連携や地域における取組に対する支援、地域ごとに関係団体等からなる協議会の設置等を行うことが考えられる。国は、地方公共団体に対し、必要な助言、情報提供等を行うこととする。

9 その他の地震時の安全対策

地方公共団体及び関係団体は、耐震改修と併せて、ブロック塀の倒壊防止、窓ガラス、天井、外壁等の非構造部材の脱落防止対策についての改善指導や、地震時のエレベーター内の閉じ込め防止対策、エスカレーターの脱落防止対策、給湯設備の転倒防止対策、配管等の設備の落下防止対策の実施に努めるべきであり、これらの対策に係る建築基準法令の規定に適合しない建築物で同法第3条第2項の適用を受けているものについては、改修の促進を図るべきである。また、南海トラフ沿いの巨大地震による長周期地震動に関する報告（平成27年12月）を踏まえて、長周期地震動対策を推進すべきである。国は、地方公共団体及び関係団体に対し、必要な助言、情報提供等を行うこととする。

二 建築物の耐震診断及び耐震改修の実施に関する目標の設定に関する事項

1 建築物の耐震化の現状

平成25年の統計調査に基づき、我が国の住宅については総数約5,200万戸のうち、約900万戸（約18パーセント）が耐震性が不十分であり、耐震化率は約82パーセントと推計されている。この推計では、耐震性が不十分な住宅は、平成15年の約1,150万戸から10年間で約250万戸減少しているが、大部分が建替えによるものであり、耐震改修によるものは10年間で約55万戸に過ぎないと推計されている。

また、法第14条第1号に掲げる建築物（以下「多数の者が利用する建築物」という。）については、約42万棟のうち、約6万棟（約15パーセント）が耐震性が不十分であり、耐震化率は約85パーセントと推計されている。

2 建築物の耐震診断及び耐震改修の目標の設定

南海トラフ地震防災対策推進基本計画、首都直下地震緊急対策推進基本計画及び住生活基本計画（平成二十八年三月閣議決定）における目標を踏まえ、住宅の耐震化率及び多数の者が利用する建築物の耐震化率について、平成三十二年までに少なくとも九

十五パーセントにすることを目標とするとともに、平成三十七年までに耐震性が不十分な住宅を、同年を目途に耐震性が不十分な耐震診断義務付け対象建築物を、それぞれおおむね解消することを目標とする。耐震化率を九十五パーセントとするためには、平成二十五年から平成三十二年までの間に、少なくとも住宅の耐震化は約六百五十万戸（うち耐震改修は約百三十万戸）とする必要があり、建替え促進を図るとともに、耐震改修のペースを約三倍にすることが必要である。また、多数の者が利用する建築物の耐震化は少なくとも約四万棟（うち耐震改修は約三万棟）とする必要があり、建替え促進を図るとともに、現在の耐震改修のペースを約二倍にすることが必要となる。

また、建築物の耐震化のためには、耐震診断の実施の促進を図ることが必要であり、平成25年から平成32年までの間に、耐震化率の目標達成のために必要な耐震改修の戸数又は棟数と同程度の耐震診断の実施が必要となると考えて、少なくとも住宅については約130万戸、多数の者が利用する建築物については約3万棟の耐震診断の実施を目標とすることとする。

特に、公共建築物については、各地方公共団体において、できる限り用途ごとに目標が設定されるよう、国土交通省は、関係省庁と連携を図り、必要な助言、情報提供を行うこととする。

三 建築物の耐震診断及び耐震改修の実施について技術上の指針となるべき事項

建築物の耐震診断及び耐震改修は、既存の建築物について、現行の耐震関係規定に適合しているかどうかを調査し、これに適合しない場合には、適合させるために必要な改修を行うことが基本である。しかしながら、既存の建築物については、耐震関係規定に適合していることを詳細に調査することや、適合しない部分を完全に適合させることが困難な場合がある。このような場合には、建築物の所有者等は、技術指針事項に基づいて耐震診断を行い、その結果に基づいて必要な耐震改修を行うべきである。

四 建築物の地震に対する安全性の向上に関する啓発及び知識の普及に関する基本的な事項

建築物の所有者等が、地震防災対策を自らの問題、地域の問題として意識することができるよう、地方公共団体は、過去に発生した地震の被害と対策、発生のおそれがある地震の概要と地震による危険性の程度等を記載した地図（以下「地震防災マップ」という。）、建築物の耐震性能や免震等の技術情報、地域での取組の重要性等について、町内会等や各種メディアを活用して啓発及び知識の普及を図ることが考えられる。国は、地方公共団体に対し、必要な助言及び情報提供等を行うこととする。

また、地方公共団体が適切な情報提供を行うことができるよう、地方公共団体とセンターとの間で必要な情報の共有及び連携が図られることが望ましい。

五 都道府県耐震改修促進計画の策定に関する基本的な事項その他建築物の耐震診断及び耐震改修の促進に関する重要事項

1 都道府県耐震改修促進計画の策定に関する基本的な事項

イ 都道府県耐震改修促進計画の基本的な考え方都道府県は、法第五条第一項の規定に基づく都道府県耐震改修促進計画（以下単に「都道府県耐震改修促進計画」と

いう。)を、建築物の耐震改修の促進に関する法律施行令の一部を改正する政令(平成三十年政令第三百二十三号。以下「改正令」という。)の施行後できるだけ速やかに改定すべきである。

都道府県耐震改修促進計画の改定に当たっては、道路部局、防災部局、衛生部局、観光部局、商工部局、教育委員会等とも連携するとともに、都道府県内の市町村の耐震化の目標や施策との整合を図るため、市町村と協議会を設置する等の取組を行いながら、市町村の区域を超える広域的な見地からの調整を図る必要がある施策等を中心に見直すことが考えられる。

また、都道府県耐震改修促進計画に基づく施策が効果的に実現できるよう、その改定に当たっては、法に基づく指導・助言、指示等を行う所管行政庁と十分な調整を行うべきである。

なお、都道府県は、耐震化の進捗状況や新たな施策の実施等にあわせて、適宜、都道府県耐震改修促進計画の見直しを行うことが望ましい。

ロ 建築物の耐震診断及び耐震改修の実施に関する目標

都道府県耐震改修促進計画においては、二二の目標を踏まえ、各都道府県において想定される地震の規模、被害の状況、建築物の耐震化の現状等を勘案し、可能な限り建築物の用途ごとに目標を定めることが望ましい。なお、都道府県は、定めた目標について、一定期間ごとに検証するべきである。特に耐震診断義務付け対象建築物については、早急に耐震化を促進すべき建築物である。このため、都道府県耐震改修促進計画に法第五条第三項第一号及び第二号に定める事項を記載する場合においては早期に記載するとともに、二二の目標を踏まえ、耐震診断義務付け対象建築物の耐震化の目標を設定すべきである。また、耐震診断結果の報告を踏まえ、耐震化の状況を検証すべきである。

さらに、庁舎、病院、学校等の公共建築物については、関係部局と協力し、今後速やかに耐震診断を行い、その結果の公表に取り組むとともに、具体的な耐震化の目標を設定すべきである。加えて、重点化を図りながら着実な耐震化を推進するため、都道府県は、公共建築物に係る整備プログラム等を作成することが望ましい。

ハ 建築物の耐震診断及び耐震改修の促進を図るための施策

都道府県耐震改修促進計画においては、都道府県、市町村、建築物の所有者等との役割分担の考え方、実施する事業の方針等基本的な取組方針について定めるとともに、具体的な支援策の概要、安心して耐震改修等を行うことができるようにするための環境整備、地震時の総合的な安全対策に関する事業の概要等を定めることが望ましい。

法第5条第3項第1号の規定に基づき定めるべき公益上必要な建築物は、地震時における災害応急対策の拠点となる施設や避難所となる施設等であるが、例えば庁舎、病院、学校の体育館等の公共建築物のほか、病院、ホテル・旅館、福祉施設等の民間建築物のうち、災害対策基本法(昭和36年法律第223号)第2条第10号に規定する地域防災計画や防災に関する計画等において、大規模な地震が発生した

場合においてその利用を確保することが公益上必要な建築物として定められたものについても、積極的に定めることが考えられる。なお、公益上必要な建築物を定めようとするときは、法第5条第4項の規定に基づき、あらかじめ、当該建築物の所有者等の意見を勘案し、例えば特別積合せ貨物運送以外の一般貨物自動車運送事業の用に供する施設である建築物等であって、大規模な地震が発生した場合に公益上必要な建築物として実際に利用される見込みがないものまで定めることがないよう留意するべきである。

法第5条第3項第2号又は第3号の規定に基づき定めるべき道路は、沿道の建築物の倒壊によって緊急車両の通行や住民の避難の妨げになるおそれがある道路であるが、例えば緊急輸送道路、避難路、通学路等避難場所と連絡する道路その他密集市街地内の道路等を定めることが考えられる。特に緊急輸送道路のうち、市町村の区域を越えて、災害時の拠点施設を連絡する道路であり、災害時における多数の者の円滑な避難、救急・消防活動の実施、避難者への緊急物資の輸送等の観点から重要な道路については、沿道の建築物の耐震化を図ることが必要な道路として定めるべきである。

このうち、現に相当数の建築物が集合し、又は集合することが確実と見込まれる地域を通過する道路、公園や学校等の重要な避難場所と連絡する道路その他の地域の防災上の観点から重要な道路については、同項第二号の規定に基づき早期に通行障害建築物の耐震診断を行わせ、耐震化を図ることが必要な道路として定めることが考えられる。

改正令の施行の際、現に同号の規定に基づき通行障害既存耐震不適格建築物（耐震不明建築物であるものに限る。以下同じ。）に係る耐震診断の結果の報告の期限に関する事項が都道府県耐震改修促進計画に記載されている場合においては、必要に応じて、当該都道府県耐震改修促進計画を速やかに改定し、建築物の耐震改修の促進に関する法律施行令（平成七年政令第四百二十九号）第四条第二号に規定する組積造の塀に係る耐震診断の結果の報告の期限に関する事項を別に記載すべきである。ただし、やむを得ない事情により当該都道府県耐震改修促進計画を速やかに改定することが困難な場合においては、改正令の施行の際現に法第五条第三項第二号の規定に基づき当該都道府県耐震改修促進計画に記載されている通行障害既存耐震不適格建築物に係る耐震診断の結果の報告の期限に関する事項は、建築物の耐震改修の促進に関する法律施行令第四条第一号に規定する建築物に係るものとみなす。また、同条第二号に規定する組積造の塀については、規則第四条の二の規定により、地域の実情に応じて、都道府県知事が耐震診断義務付け対象建築物となる塀の長さ等を規則で定めることができることに留意すべきである。

さらに、同項第四号の規定に基づく特定優良賃貸住宅に関する事項は、法第二十八条の特例の適用の考え方等について定めることが望ましい。加えて、同項第5号の規定に基づく独立行政法人都市再生機構又は地方住宅供給公社（以下「機構等」という。）による建築物の耐震診断及び耐震改修の実施に関す

る事項は、機構等が耐震診断及び耐震改修を行う地域、建築物の種類等について定めることが考えられる。なお、独立行政法人都市再生機構による耐震診断及び耐震改修の業務及び地域は、原則として都市再生に資するものに限定するとともに、地域における民間事業者による業務を補完して行うよう留意する。

ニ 建築物の地震に対する安全性の向上に関する啓発及び知識の普及

都道府県耐震改修促進計画においては、個々の建築物の所在地を識別可能とする程度に詳細な地震防災マップの作成について盛り込むとともに、相談窓口の設置、パンフレットの作成・配布、セミナー・講習会の開催、耐震診断及び耐震改修に係る情報提供等、啓発及び知識の普及に係る事業について定めることが望ましい。特に、地震防災マップの作成及び相談窓口の設置は、都道府県内の全ての市町村において措置されるよう努めるべきである。

また、地域における地震時の危険箇所の点検等を通じて、住宅・建築物の耐震化のための啓発活動や危険なブロック塀の改修・撤去等の取組を行うことが効果的であり、必要に応じ、市町村との役割分担のもと、町内会や学校等との連携策についても定めることが考えられる。

ホ 建築基準法による勧告又は命令等の実施

法に基づく指導・助言、指示、命令等について、所管行政庁は、優先的に実施すべき建築物の選定及び対応方針、公表の方法等について定めることが望ましい。また、所管行政庁は、法第12条第3項（法附則第3条第3項において準用する場合を含む。）又は法第15条第3項の規定による公表を行ったにもかかわらず、建築物の所有者が耐震改修を行わない場合には、建築基準法第10条第1項の規定による勧告、同条第2項又は第3項の規定による命令等を実施すべきであり、その実施の考え方、方法等について定めることが望ましい。

2 市町村耐震改修促進計画の策定に関する基本的な事項

イ 市町村耐震改修促進計画の基本的な考え方

平成十七年三月に中央防災会議において決定された地震防災戦略において、東海地震及び東南海・南海地震の被害を受けるおそれのある地方公共団体については地域目標を定めることが要請され、その他の地域においても減災目標を策定することが必要とされている。こうしたことを踏まえ、法第六条第一項において、基礎自治体である市町村においても、都道府県耐震改修促進計画に基づき、市町村耐震改修促進計画を定めるよう努めるものとされたところであり、可能な限り全ての市町村において市町村耐震改修促進計画が策定されることが望ましい。また、改正令の施行前に市町村耐震改修促進計画を策定している市町村にあっては、当該市町村耐震改修促進計画を改正令の施行後できるだけ速やかに改定すべきである。

市町村耐震改修促進計画の策定及び改定に当たっては、道路部局、防災部局、衛生部局、観光部局、商工部局、教育委員会等とも連携するとともに、都道府県の耐震化の目標や施策との整合を図るため、都道府県と協議会を設置する等の取組を行いながら、より地域固有の状況に配慮して作成することが考えられる。

また、市町村耐震改修促進計画に基づく施策が効果的に実現できるよう、法に基づく指導、助言、指示等を行う所管行政庁と十分な調整を行うべきである。

なお、市町村は、耐震化の進捗状況や新たな施策の実施等にあわせて、適宜、市町村耐震改修促進計画の見直しを行うことが望ましい。

ロ 建築物の耐震診断及び耐震改修の実施に関する目標

市町村耐震改修促進計画においては、都道府県耐震改修促進計画の目標を踏まえ、各市町村において想定される地震の規模、被害の状況、建築物の耐震化の現状等を勘案し、可能な限り建築物の用途ごとに目標を定めることが望ましい。なお、市町村は、定めた目標について、一定期間ごとに検証すべきである。

特に耐震診断義務付け対象建築物については、早急に耐震化を促進すべき建築物である。このため、市町村耐震改修促進計画に法第六条第三項第一号に定める事項を記載する場合においては早期に記載するとともに、二二の目標を踏まえ、耐震診断義務付け対象建築物の耐震化の目標を設定すべきである。また、耐震診断の結果の報告を踏まえ、耐震化の状況を検証すべきである。

さらに、庁舎、病院、学校等の公共建築物については、関係部局と協力し、今後速やかに耐震診断を行い、その結果の公表に取り組むとともに、具体的な耐震化の目標を設定すべきである。加えて、重点化を図りながら着実な耐震化を推進するため、市町村は、公共建築物に係る整備プログラム等を作成することが望ましい。

ハ 建築物の耐震診断及び耐震改修の促進を図るための施策

市町村耐震改修促進計画においては、都道府県、市町村、建築物の所有者等との役割分担の考え方、実施する事業の方針等基本的な取組方針について定めるとともに、具体的な支援策の概要、安心して耐震改修等を行うことができるようにするための環境整備、地震時の総合的な安全対策に関する事業の概要等を定めることが望ましい。

法第6条第3項第1号又は第2号の規定に基づき定めるべき道路は、沿道の建築物の倒壊によって緊急車両の通行や住民の避難の妨げになるおそれがある道路であるが、例えば緊急輸送道路、避難路、通学路等避難場所と連絡する道路その他密集市街地内の道路等を定めることが考えられる。特に緊急輸送道路のうち、市町村の区域内において、災害時の拠点施設を連絡する道路であり、災害時における多数の者の円滑な避難、救急・消防活動の実施、避難者への緊急物資の輸送等の観点から重要な道路については、沿道の建築物の耐震化を図ることが必要な道路として定めるべきである。

このうち、現に相当数の建築物が集合し、又は集合することが確実と見込まれる地域を通過する道路、公園や学校等の重要な避難場所と連絡する道路その他の地域の防災上の観点から重要な道路については、同項第一号の規定に基づき早期に沿道の建築物の耐震化を図ることが必要な道路として定めることが考えられる。

改正令の施行の際、現に同号の規定に基づき通行障害既存耐震不適格建築物に係る耐震診断の結果の報告の期限に関する事項が市町村耐震改修促進計画に記載

されている場合においては、必要に応じて、当該市町村耐震改修促進計画を速やかに改定し、建築物の耐震改修の促進に関する法律施行令第四条第二号に規定する組積造の塀に係る耐震診断の結果の報告の期限に関する事項を別に記載すべきである。ただし、やむを得ない事情により当該市町村耐震改修促進計画を速やかに改定することが困難な場合においては、改正令の施行の際現に法第六条第三項第一号の規定に基づき当該市町村耐震改修促進計画に記載されている通行障害既存耐震不適格建築物に係る耐震診断の結果の報告の期限に関する事項は、建築物の耐震改修の促進に関する法律施行令第四条第一号に規定する建築物に係るものであるとみなす。また、同条第二号に規定する組積造の塀については、地域の実情に応じて、市町村長が耐震診断義務付け対象建築物となる塀の長さ等を規則で定めることができることに留意すべきである。

ニ 建築物の地震に対する安全性の向上に関する啓発及び知識の普及

市町村耐震改修促進計画においては、個々の建築物の所在地を識別可能とする程度に詳細な地震防災マップの作成について盛り込むとともに、相談窓口の設置、パンフレットの作成・配布、セミナー・講習会の開催、耐震診断及び耐震改修に係る情報提供等、啓発及び知識の普及に係る事業について定めることが望ましい。特に、地震防災マップの作成及び相談窓口の設置は、全ての市町村において措置されるよう努めるべきである。

また、地域における地震時の危険箇所の点検等を通じて、住宅・建築物の耐震化のための啓発活動や危険なブロック塀の改修・撤去等の取組を行うことが効果的であり、必要に応じ、町内会や学校等との連携策についても定めることが考えられる。

ホ 建築基準法による勧告又は命令等の実施

法に基づく指導・助言、指示等について、所管行政庁である市町村は、優先的に実施すべき建築物の選定及び対応方針、公表の方法等について定めることが望ましい。

また、所管行政庁である市町村は、法第12条第3項（法附則第3条第3項において準用する場合を含む。）又は法第15条第3項の規定による公表を行ったにもかかわらず、建築物の所有者が耐震改修を行わない場合には、建築基準法第10条第1項の規定による勧告、同条第2項又は第3項の規定による命令等を実施すべきであり、その実施の考え方、方法等について定めることが望ましい。

3 計画の認定等の周知

所管行政庁は、法第17条第3項の計画の認定、法第22条第2項の認定、法第25条第2項の認定について、建築物の所有者へ周知し、活用を促進することが望ましい。なお、法第22条第2項の認定制度の周知にあたっては、本制度の活用が任意であり、表示が付されていないことをもって、建築物が耐震性を有さないこととはならないことについて、建築物の利用者等の十分な理解が得られるよう留意するべきである。

附 則

- 1 この告示は、建築物の耐震改修の促進に関する法律の一部を改正する法律（平成17年法律第120号）の施行の日（平成18年1月26日）から施行する。
- 2 平成7年建設省告示第2089号は、廃止する。
- 3 この告示の施行前に平成7年建設省告示第2089号第1ただし書の規定により、国土交通大臣が同告示第1の指針の一部又は全部と同等以上の効力を有すると認めた方法については、この告示の別添第1ただし書の規定により、国土交通大臣が同告示第1の指針の一部又は全部と同等以上の効力を有すると認めた方法とみなす。

附 則（平成25年10月29日国土交通省告示第1055号）

この告示は、建築物の耐震改修の促進に関する法律の一部を改正する法律の施行の日（平成25年11月25日）から施行する。

附 則（平成28年3月25日国土交通省告示第529号）この告示は、公布の日から施行する。

附 則（平成30年12月21日国土交通省告示第1381号）

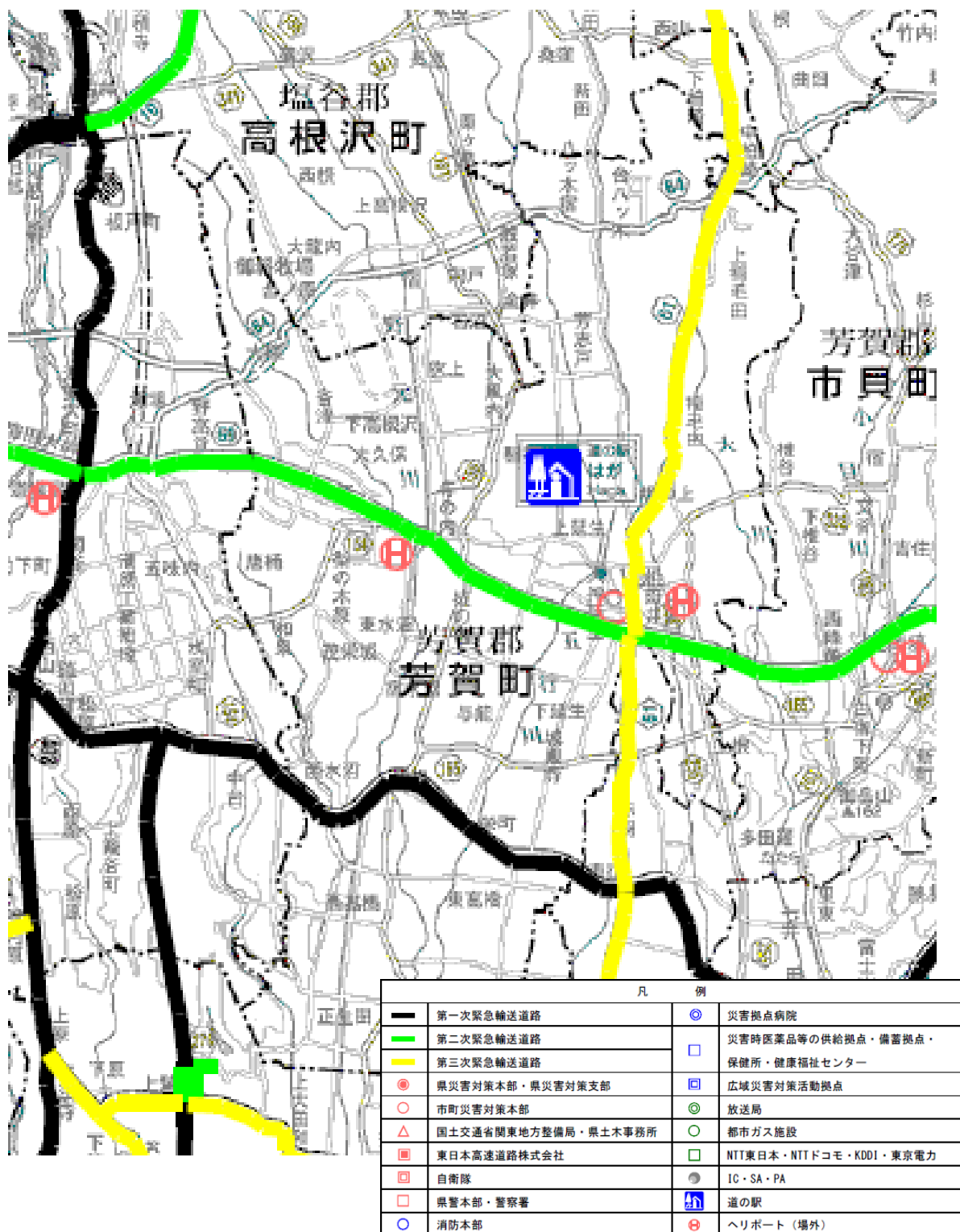
この告示は、建築物の耐震改修の促進に関する法律施行令の一部を改正する政令の施行の日（平成31年1月1日）から施行する。

資料2 耐震改修促進法における規制対象一覧

多数の者が利用する建築物等は以下のとおりです。

耐震改修促進法における規制対象一覧					
※義務付け対象は旧耐震建築物					
用途	特定既存耐震不適格建築物の要件	指示対象となる特定既存耐震不適格建築物の要件	耐震診断義務付け対象建築物の要件		
学校	小学校、中学校、中等教育学校の前期課程若しくは特別支援学校	階数2以上かつ1,000㎡以上 ※屋内運動場の面積を含む。	階数2以上かつ1,500㎡以上 ※屋内運動場の面積を含む。	階数2以上かつ3,000㎡以上 ※屋内運動場の面積を含む。	
	上記以外の学校	階数3以上かつ1,000㎡以上			
体育館（一般公共の用に供されるもの）	階数1以上かつ1,000㎡以上	階数1以上かつ2,000㎡以上	階数1以上かつ5,000㎡以上		
ボーリング場、スケート場、水泳場その他これらに類する運動施設	階数3以上かつ1,000㎡以上	階数3以上かつ2,000㎡以上	階数3以上かつ5,000㎡以上		
病院、診療所					
劇場、観覧場、映画館、演芸場					
集会場、公会堂					
展示場					
卸売市場					
百貨店、マーケットその他の物品販売業を営む店舗				階数3以上かつ2,000㎡以上	階数3以上かつ5,000㎡以上
ホテル、旅館					
賃貸住宅（共同住宅に限る。）、寄宿舎、下宿					
事務所					
老人ホーム、老人短期入所施設、福祉ホームその他これらに類するもの	階数2以上かつ1,000㎡以上	階数2以上かつ2,000㎡以上	階数2以上かつ5,000㎡以上		
老人福祉センター、児童厚生施設、身体障害者福祉センターその他これらに類するもの					
幼稚園、保育所	階数2以上かつ500㎡以上	階数2以上かつ750㎡以上	階数2以上かつ1,500㎡以上		
博物館、美術館、図書館	階数3以上かつ1,000㎡以上	階数3以上かつ2,000㎡以上	階数3以上かつ5,000㎡以上		
遊技場					
公衆浴場					
飲食店、キャバレー、料理店、ナイトクラブ、ダンスホールその他これらに類するもの					
理髪店、質屋、貸衣装屋、銀行その他これらに類するサービス業を営む店舗					
工場（危険物の貯蔵場又は処理場の用途に供する建築物を除く。）					
車両の停車場又は船舶若しくは航空機の発着場を構成する建築物で旅客の乗降又は待合の用に供するもの				階数3以上かつ2,000㎡以上	階数3以上かつ5,000㎡以上
自動車車庫その他の自動車又は自転車の停留又は駐車のための施設					
保健所、税務署その他これらに類する公益上必要な建築物					
危険物の貯蔵場又は処理場の用途に供する建築物				政令で定める数量以上の危険物を貯蔵又は処理するすべての建築物	500㎡以上
避難路沿道建築物	耐震改修等促進計画で指定する避難路の沿道建築物であって、前面道路幅員の1/2超の高さの建築物（道路幅員が12m以下の場合は6m超）	左に同じ	耐震改修等促進計画で指定する重要な避難路の沿道建築物であって、前面道路幅員の1/2超の高さの建築物（道路幅員が12m以下の場合は6m超）		
防災拠点である建築物			耐震改修等促進計画で指定する大規模な地震が発生した場合においてその利用を確保することが公益上必要な、病院、官公署、災害応急対策に必要な施設等の建築物		

資料3 緊急輸送道路ネットワーク計画図



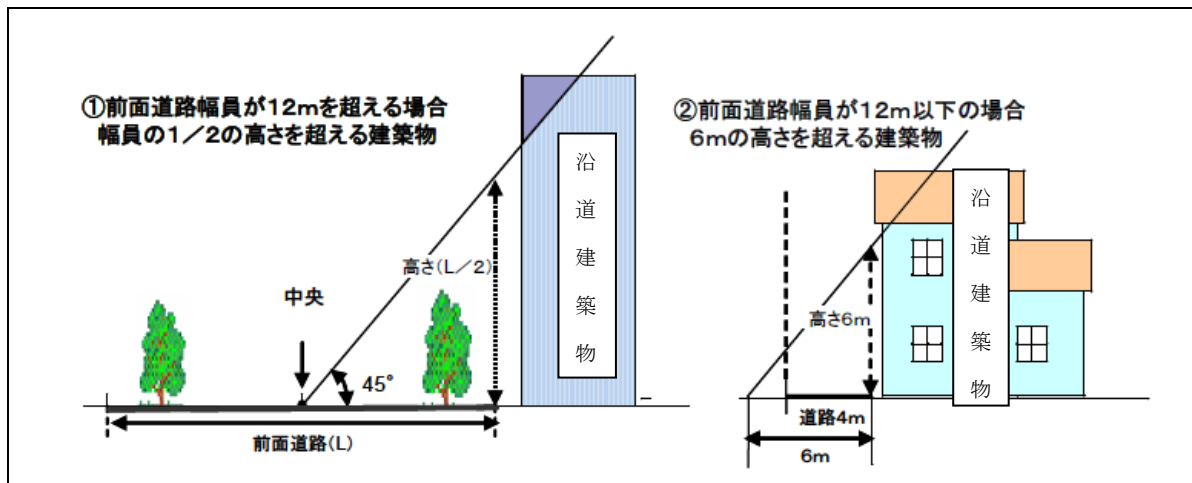
(栃木県緊急輸送道路ネットワーク計画図より)

※平成30年4月時点における状況です。

資料4 一定の高さ以上の住宅・建築物

そのいずれかの部分の高さが、当該部分から前面道路の境界線までの水平距離に、次の各号に掲げる当該前面道路の幅員に応じ、それぞれ当該各号に定める距離を加えたものを超える建築物

- 一 12m以下の場合 6m
- 二 12mを超える場合 前面道路の幅員の1/2に相当する距離



芳賀町 都市計画課

〒321-3392 栃木県芳賀郡芳賀町大字祖母井 1020

Tel. 028-677-6020 Fax. 028-677-6088

E-mail : toshikeikaku@town.tochigi-haga.lg.jp

<http://www.town.tochigi-haga.lg.jp/>